

## モノには裏と表がある

葉っぱの裏表、蝶の裏表、色々なモノには裏と表が存在します。例えば、葉の裏と表には、機能的な違いがあります。植物は、太陽の光、エネルギー、水、そして二酸化炭素を基にデンプン等の養分を作り出す光合成により成長します。つまり、太陽の光をたくさん浴びて、効率よく光合成することは植物にとって重要なことなのです。そこで、葉がその役割を担います。太陽に向かって光を浴びる表面には、光合成を行う葉緑体がたくさんあり、養分を作る機能に優れています。では、裏側は？気孔という空気中の二酸化炭素を取り入れたり、酸素を出したり（ちなみに、植物も酸素を取り込んで呼吸もしてるよ。）するガス交換のための器官が多くあり、表とは違う役割を担っています。こうして機能的に違う表と裏が、人の目を見た時にも色の違いとして見えるのです。

でも、自然はそんなに単純ではありません。図1は、ヒオウギという植物の写真ですが、この葉には裏しかありません。もう少し正確に言うと、裏側の性質をもつ葉しかありません。実は、ネギも同じように葉の裏しかない植物で、こうした葉を単面葉と呼びます。ネギのように丸い形をしていると、なんとなく裏と表がない感じが理解

できるのではないのでしょうか。くるくると裏と表の境目がなく続いていますものね。

葉に裏と表がある。「そんなん当たり前やん！」と置いていたみなさんにとっては、少し意外な事実じゃないですか？

## モノだけじゃない、裏と表

モノに裏表があることは、理解しやすいことですが、街や都市にもこのような裏と表の考え方は当てはめられることがあります。その典型的な事例が東海道と中山道の関係性です。表紙の資料は、東海道と中山道に対して、その道中を描いた絵図「東海木曾両道中懐宝図鑑」（京都大学附属図書館所蔵）です。各宿場の特徴が上下で対になって描かれたユニークな本で、“懐宝図”とあるように、ハンドブックとして持ち歩けるサイズです。さて、その東海道と中山

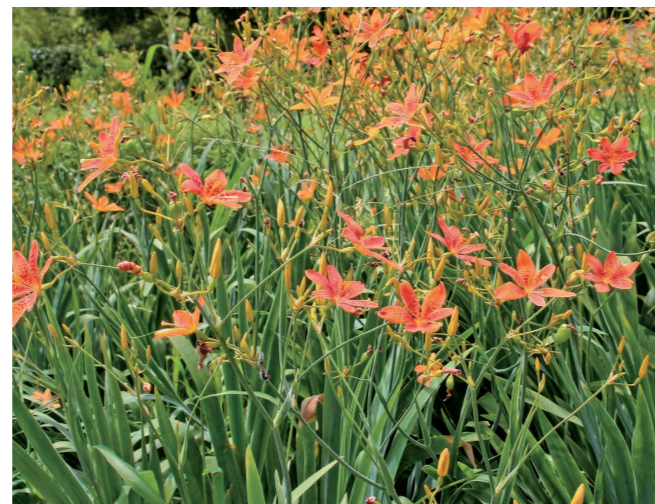


図1 ヒオウギ

道ですが、江戸時代に五街道として、幕府直轄で整備された街道のうち、京都と江戸を結ぶ、重要な二つの街道です。東海道は太平洋沿いを進む比較的平坦な道であることに對し、中山道は険しい山道も多く、かつ、距離も少し長い道のりでした。そのため、東海道は日本の大動脈として、人の移動はもちろん、物流や情報、文化が行き交う、動的なまさに表街道でした。一方で、東海道には複数の大きな河川を渡る箇所があり、橋が架かっていない当時の状況では、増水時には川を渡れず足止めされるというリスクも存在しました。そこで、バイパス的な機能を果たしたのが中山道です。険しい山道は通るものの、川止めのリスクがなく、旅程が確実であったため、多く利用されました。表街道の賑わいとは異なる発展を見せた中山道は、当時の様相を今にも色濃く残す静的な裏の街道のような存在なのです。

## 裏と表とオモテとウラと。

単面葉の話題の中で“すべてが裏”でできていると説明しましたが、ヒオウギ的に見れば、“これが私の表なのだ！”と置いてあるかもしれません。科学的な論拠に基づく定義も、立場を変えれば、見え方が変わ

る可能性があるのです。図2は、表がキラキラきれいなモルフォ蝶の写真ですが、この面が表なのか？ヒラヒラと舞う様子からはどちらが裏で表なのかはわかりません。見るタイミングや立場によって、表と裏はいつも繰り返し訪れる連続した二つの面なのだ改めて理解できるかもしれませんね。

今回の企画展では、人と自然にまつわる様々なモノやコト、そしてモノゴト、つまり関係性の裏と表を展示しています。この企画展を通じて、日常の中にあるモノ・コト・モノゴトには、表裏両面存在し、それらが連続して、繋がっているのだなと感じてもらえることができたらうれしく思います。そして、人と自然の関係も、表と裏を行ったり来たりしながら繋がっているのだと、思いを馳せてみてください。

福本 優（環境計画研究グループ）



図2 レテノール・モルフォ